

# 松本清張記念館

◆館報◆

2010.11  
第35号

虐待の中に生き抜いてきた民族の詩を黄昏の色の中でうたいたい。  
革命とか、抵抗とかいう字句をいつさい使わずに、

## 心からうたう詩を書きたい。



「北の詩人」は、昭和37年1月から昭和38年3月まで、「中央公論」に掲載された。

『北の詩人』  
昭和39年10月 中央公論社

現在入手できる本  
松本清張全集  
第17巻(文藝春秋)

### 作品紹介

プロレタリア作家・林和イム  
フアは、日本の敗戦により解放された独立運動の同志たちと朝鮮文学建設本部を組織した。かつて朝鮮共産党の影響下に組織されたプロレタリア文学の団体「カップ」で中央委員として活動した林和は、日本警察の弾圧を受け全羅北道で検挙された経験を持つ。日本が去った喜びも束の間、アメリカ軍政庁による弾圧が始まった。日帝時代から地下に潜って活動していたという安永達(アンヨンダル)は、解放後に上陸してきたアメリカの動向に敏かった。朝鮮文学建設本部の中心人物となった林和は、今後に有利な情報を知りたかった。そんな時、CICから突然呼び出され、文学団体について聴取される。アメリカの政策のもと、朝鮮文学の再建を願う林和だったが、その後巧妙に彼へと接近してきたアメリカに、かつての背信行為を種に情報提供を迫られ、新たな裏切りを犯す。やがて同志が次々と捕まるなか「北に行きなさい」との指令に従うが――。苦難の果てに生き延びる道を選んだ林和を動かすのは、ただ文学への情熱だけだった。

(専門学芸員 柳原 暁子)

### 目次

- 開館十二周年記念 佐野真一講演会 ..... 2
- 企画展紹介「松本清張と東アジア」 ..... 5
- 関門連携特別企画展 ..... 5
- 展示品紹介 ..... 6
- 探検！清張記念館 ..... 6
- 友の会活動報告 ..... 7
- トピックス ..... 8

# 戦後出版ジャーナリズムを 駆け抜けた巨人・松本清張

佐野眞一

○平成二十二年八月四日(水)

○北九州市立男女共同参画センタームーブ二階ホール

○参加者四〇〇名

司会者の方からご紹介がありましたように、私は昨秋東京新聞で「編集者の見た松本清張」と題して、清張を最も身近で見えてきた編集者の生の証言を通して、類い希なる作家・松本清張を描きました。なぜこの演題にし、なぜ「編集者が見た」に力点を置いたのかというあたりからお話していきます。

## □週刊誌ブームの寵児

ご存知と思いますが、いま大変な出版不況です。先月国際ブックフェアで「ゲイテンベルクの時代は終わったのか」と題して基調講演をしました。未曾有の出版不況の様々な要因や、紙の本から電子出版に大きく変化しつつある今の時代をご報告しましたが、出版は本当に危機を迎え、雑誌もどんどん潰れています。なぜこの状況が生まれたかは今日のテーマではありませんが、松本清張という作家を通して語れることの一つに、出版ジャーナリズムの衰退があります。この問題を含め、松本清張は戦後の出版、特に週刊誌

ブームを語る唯一の作家ではないでしょうか。

清張は「或る『小倉日記』伝」で芥川賞を受賞、間もなくして上京、活動の場を東京に移します。昭和三十四年は極めてエポックメイキングな年ですが、現在の天皇が結婚なさってミッチーブームが起きます。週刊誌も創刊ラッシュを迎え、清張は脂が乗りきった活動をします。この年は月刊誌に八本、新聞では三本、週刊誌に六本の連載、その他細切れの類も含め、多分月産千枚を超えています。翌三十五年は安保闘争の年ですが、「日本の黒い霧」「球形の荒野」「砂の器」などを連載、問題作、話題作を連発していました。このとき五十歳を超えているわけですが、デビューが遅かったから時間がないんだと机にかじりついて寝る間も惜しんで執筆活動を続け、自分は遅咲きだ時間がないと口癖に言っていた清張さんを思うと、胸が詰まります。

新聞記者に「作家の才能とは何ですか」と聞かれたことがあるそうです。記者は

想像力や読書量とかいった生得的な返事を期待していたようですが、「どれだけ原稿用紙の前に座っていられるか。その忍耐力だ」と非常に散文的な答えをしたそうです。いかにも清張らしいし、こういう作家は以後誰もいないのではないのでしょうか。言うまでもなく清張は社会派ミステリーで有名ですが、時代小説や古代史にもテリトリーを広げ、ノンフィクションにも金字塔をうち立て、四十三歳でデビューし八十二で亡くなるまで全力疾走しました。こんなと湧き出る想像力や創作力といい、二度と出ない不世出の作家だったと改めて感じます。

先程「週刊誌ブーム」という言葉を使いましたが、松本清張という作家を生み出した背景の一つに日本の高度経済成長があるでしょう。高度経済成長をうんと簡単に定義すれば、日本列島が攪拌されて民族が大移動した時代です。昭和二十年代は九州に生まれた方の多くは九州で死んでいく時代でした。しかし昭和三十年代は例えば中卒が金の卵ともてはやされ、東北から東



京に、あるいは北九州から大阪へという大移動がはじまりました。東京新聞での連載で書いたことですが、清張は大変旅が好きの人です。清張と並ぶ国民作家の一人の司馬遼太郎は街道の人、峠の上に立ってやや俯瞰的に上から目線で歴史的な記述をする。対して清張は鉄道の人、車窓からあるいは座席で流れゆく風景を切り取ってゆく。清張作品は名もない地方都市を舞台にすることが多いですが、どこかで見たことがある風景が基本にあります。都会へ出た、村が忘れられない、町に帰っていくという往復運動が、清張作品を詳細にみていくとそういう音楽がベースに流れていると思います。

高度経済成長は横並び社会で非常に分厚い中間層が生まれた時代でした。「一億総中流」という言葉もありましたが、現実には猛烈な競争社会、落ちる奴は落ちていくある種苛酷な競争社会が始まりました。そこを松本清張という人は見事につかんだ。官僚社会で自殺する課長補佐など、清張が好んだ世界に典型的に現れています。ぎり

ぎりの線で踏ん張って歯を食いしばって生きていく人間達に清張は強いエールを送りました。だからこそ広汎な読者を獲得できたんだと思います。いままでの日本の近代小説とは全く異質な世界を清張が描いたと言えるでしょう。

### □清張の「磁場」——編集者との出会い

清張を担当した編集者は本当にきら星のごとき人達です。例えば清張が尊敬する作家のひとりとして挙げる菊池寛、その衣鉢を継いだ文藝春秋の池島信平とも大きな仕事をしています。新潮社で「週刊新潮」を創り死ぬまでタイトルを付けていた齋藤十一という伝説の編集者、僕も

## 佐野 眞一

1947(昭和22)年、東京に生まれる。早稲田大学文学部卒業後、出版社勤務を経てノンフィクション作家に。「戦後」と「現代」を映し出す意欲的なテーマに挑み続けている。

97年、「旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三」で第28回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。

著書に『巨怪伝』『カリスマ』『東電OL殺人事件』『枢密院議長の日記』などがある。

昨年、「甘粕正彦 乱心の曠野」で第31回講談社ノンフィクション賞を受賞。また、東京新聞で「編集者の見た松本清張」を連載した。



大分鍛えられましたけど、彼もいち早く清張に目を付けて初期の「芸術新潮」で仕事をしています。あるいは光文社でカッパノベルズという新書版の形を作った神吉晴夫も大ベストセラーを生み出した卓越した編集者ですが、「点と線」などを一千万部という部数に持ち上げていきました。こうした戦後出版史を語る時絶対に忘れてはならない有名な人物と清張はタッグを組み二人三脚で歩んでいったことを、ぜひ覚えておいて頂きたい。

今年の三月、河出書房の寺田博さんが亡くなりました。取材で清張について寺田さんの話を聞きに行った僕が多分一番最後に会った人間です。寺田さんは清張が一番書きたくなかった「半生の記」を書かせた男です。「よくあのいやがる清張さんにこれだけのことを書かせましたね」と言ったところ、こんな話をしてくれました。

最初は時代小説を依頼したのですが、清張さんは多忙で「張り付きで時代考証をやってくれる人間を一人くれれば考えないでもないね」と言う。しかしそんな余裕はなく、そこで執念深く考えたのは、じゃあ清張さんに一番負担がかからない方法は何か。取材もいらず書けるもの。それは頭の中にあるものを出して貰うことだと、「自分の人生を書いて下さい」と言っただけです。

しかし「とんでもない、僕が私小説を嫌いなのは知っているよな」とはねつけたそうです。それでも寺田さんは日参し「今月号に清張さんの伝記が載るとうちのおやじは楽しみにしていました、死にまじした」と、これは嘘なんですね。三ヶ月位

して「お袋も楽しみにしていましたが死にました」「八人くらい親族を殺したそうです。勘のいい清張ですから嘘と分かったでしょうが、あまりのしつこさに音を上げ「じゃ書こう」と「半生の記」ができたんですね。随分脚色もあり本当とは言えない部分も沢山ありますが、清張研究には欠かせない一冊になった。寺田博は名伯楽で、小川洋子やよしもとばなな、島田雅彦を発掘したし、中上健次との武勇伝もある伝説の編集者です。そんな編集者が日参して清張に書かせたのは、やっぱり清張という人に磁場があり、また、「この男には嘘をついても書かせたい」という人間的な埋蔵量があったからだと思っています。

### □散文精神の継承

僕は二月に「日本の黒い霧」についてお話ししました。占領下の日本の怪事件を扱った作品で、いまみれば外れとの指摘もあるかと思いますが、サンフランシスコ講和条約の数年後にGHQ内部の暗闘を描いた勇氣は凄まじい。殺されるという恐怖を抱いたでしょう、でも書かずにはいられなかった。自分たちを重圧で締め付けるアメリカ軍に対する怒りが、清張をして「日本の黒い霧」という問題を残させた原動力だったのではないのでしょうか。



ちょっと話が逸れますが、そこには僕は広津和郎という作家の存在があるのではと思います。広津さんが戦前に書いた「散文精神について」という文章が非常にいいのでちょっと読み上げます。「どんな事があったてもめげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観もせず、楽観もせず、生き

通していく精神——それが散文精神だと思えます」「じっと我慢して冷静に、見なければならぬものは決して見のがさず、そして見なければならぬものに怯えたり、戦慄したり、眼を蔽うたりしないで、何処までもそれを見つめながら堪えて生きて行こうという精神」という文章です。この散文精神はともまねできないと開高健が言っていますが、その散文精神をめぐりに継承したのが松本清張で、一大成果が「昭和史発掘」だと思います。「昭和史発掘」には、僕は「歴史を肉体化して書く」とはこういうことだ」と教わりました。

僕は清張さんにお目にかかっていないのですが、三十年近く前「週刊文春」の「企業研究」というページで伸び盛りの企業について書いていました。ある時担当者が「清張さんから電話があった」と言うんですね。「佐野君という人が書くのはめちゃくちゃ面白いね。ああいう人を大事にしてやってくださいよ」と清張さんからの伝言を聞いて、大変感動し恐縮しま



した。同時に、七十五近かった清張さんが、他人の作品をきちっと読み、本当に面白いと思ったからわざわざ担当編集者に電話をした——何という人だろうと思えます。僕はノンフィクションを生涯の仕事にしています。松本清張を食らうように読んで、それから松本清張から「あの男の書くものは面白いよ」と言われたことを大きな励みに、今日まで書きつづけています。

### □冬眠しない作家

松本清張が最後までジャーナリズム精神を手放さなかったと思うのは、遺作「神々の乱心」ですね。非常にナーバスで今日的なテーマを、かれこれ二十年以上前に扱って、今の皇室・天皇制の危機を視事に描いています。

僕は三年前、宮内庁にも深く関与した高級官僚・倉富三郎の戦前の日記を扱った「枢密院議長の日記」という本を出しました。中に、当時は摂政の昭和天皇に

対する貞明皇后の「ああいう神を敬わないうようなことがこれ以降続いたら神罰が必ず当たる」という凄まじい怒りの言葉が記されており、僕はびっくりしました。日本の天皇制にはまだ解明できていない暗部が山ほどあることを貞明皇后の「神罰必ずや当たるべし」という言葉の怨念に込められていると思いました。

「神々の乱心」で恐ろしいのは、松本清張は間違いなく倉富日記は読んでいないにも関わらず、その貞明皇后とのちの昭和天皇の確執の予感を持ったことですね。すぐれた作家はそういうものを見抜く、あるいは鼻で感じるんでしょうね。『神々の乱心』は、皇太后にある新興宗教が伝道される過程で天皇制が累卵の危機に瀕するのではないかという、途中で終わっているのに結末は分かりませんが、大きな構想力で描かれている。いま起きている危機を清張はあの時代から分かっていたんだと思います。清張さんは古代史もノンフィクションも書くけど、生涯、今の日本はこういう状況なのか、俺はこう見える」ということを手放さず、様々な作品の中で開示した、本当の作家だと思えます。



冒頭に出版不況と云いました。誤解を招く言い方かもしれませんが、僕は読書は犯罪とよく似ていると思うんです。読書も犯罪も「自分の想像力に負荷を掛けること」だからです。本は物理的には紙に染みを付け厚紙で綴じたものですが、それを我々は想像力で読み解きながら、身につまされたり怒ったり涙を流したり同情したり笑ってみたりできます。そういう負荷を絶えずかけ続けるのが、僕は読書だし創作だと思います。チープな本も出回っていますが、それは日本人の読む力が減退してしまうと恐れています。

その対極にあるのが負荷を掛けないと読めない本です。いささか今の読者にとつてはハードかもしれないけど、確実に松本清張は我々に負荷をかけてすぐれた世界を見せてくれる。優れた作品は、小説でもノンフィクションでも、僕の経験則では、読み終わってページを閉じて、目を上げて、世界、周りの風景を見て、読む前と一ミリだけ違ってきます。必ず違って見えるんです。いい本は。そういう優れた作家として松本清張という人がいるのです。

今年の春頃「文藝春

秋」で半藤一利さんと宮部みゆきさんと座談会をしました。実は東京の下町の高校の先輩後輩なんです。三時間くらい清張さんの魅力を語り合い、非常に面白く評判も良かったようです。結論として僕は、持つて行き場のない憤懣であるとか哀しみとかを誰でももっているもので、それを松本清張は確実に書いている作家だと言いました。すこしむくつけない言葉で「怨念」と言いますか、崇徳院や菅原道真が一方では神さまになる訳ですが、そういうものを松本清張というのは絶えず離さなかった人なんじゃないでしょうか、だからこそ松本清張は死んで十八年経っても我々の中で生き続けているのではないのでしょうか。

外山滋比古の「近代読者論」に「作家というのには必ず死ぬと冬眠する」という言葉がありますが、松本清張は冬眠しませんでした。これからも恐らく冬眠しない作家だと思えます。それは彼が我々の中に絶えず生きた息吹、怒りや哀しみとか憤懣であるとかを絶えず送り続けているからではないでしょうか。

抜群のストーリーテラーであったり、うなるようなトリックであったり、様々な要素があろうと思えますが、戦後の大きな変貌の中で、しっかりと日本を見据え、戦前から続く暗い時代を、オキユパイドジャパンの時代を、最後は皇室あるいは天皇制まで見据えている。その目線がいまも我々の中に届いているから多分清張は冬眠しない、あるいはできない。作家にとっての榮譽は、読者の中に絶えず生き続けていくことだと僕は確信しています。

# 松本清張と東アジア

—描かれた〈東アジア・東南アジア〉読まれる〈清張〉—

## I 清張の描く東(南)アジア

清張文学の特徴の一つに《世界への視座》があります。松本清張は広く海外に眼を向け、多くの作品を書きました。中でも、朝鮮半島(韓国・北朝鮮)や中国といった東アジアや、ベトナム、ラオス、マレーシアなどの東南アジアを舞台にした作品を紹介します。

韓国



『北の詩人』

朝鮮のプロレタリア詩人・林和を主人公にしたモデル小説

中国



『密教の水源を見る—空海・中国・インド』

密教の伝来を探るために中国へ渡った清張が人間・空海の実像に迫る

東南アジア



『熱い絹』

タイのシルク王失踪事件の謎を戦争・謀略の歴史に重ねた作品

## II 清張と東アジア

—衛生兵・市民・作家・古代史家・ジャーナリストとして—



北ベトナム、ファン・バン・ドン首相と(1968年)



会談の筆記手帖

松本清張の東アジア体験は、陸軍衛生兵としての朝鮮半島駐屯にさかのぼります。小倉で「米軍黒人兵脱走事件」など朝鮮戦争を経験し、作家になってからはベトナム戦争や中国の「林彪・四人組事件」などに、ジャーナリストとして向き合いました。古代史家とベトナムの古代文化を視察し、取材で中国、ラオス、マレーシア、香港を歴訪しています。

## III 東アジアで読まれる〈清張〉 —韓国・中国・台湾

松本清張は東アジア各国で、30年ほど前から翻訳され、現在も出版され読まれ続けています。その受容のあり方や読者の声を紹介し、展示会場に東アジアの架空の書店・清張コーナーを再現します。



韓国

『宮部みゆき責任編集 松本清張傑作短篇コレクション』上・中・下  
2009年  
ブックスピア 発行



中国

『日本の黒い霧』  
1965年  
作家出版社 発行



台湾

『半生の記』  
2007年  
麦田出版 発行

### 関門連携特別企画展

# 清張の原風景

遙かな記憶 — 下関編 —

開催期間／10月5日(火)から12月26日(日)まで  
開催場所／田中絹代ぶんか館(下関市立近代先人顕彰館)1階  
観覧料／無料  
主催／下関市・北九州市



松本清張は、小倉出身の作家であると同時に、関門の作家と言ってもいいような要素を持っています。「回想的自叙伝」(のちの『半生の記』)に、「もし、少年に『未知への憧れ』があるとしたら、私のその思慕は三つぐらいのときに見た門司の夜景からはじまったのかもしれない」と書いてあります。当時から、下関港と門司港には国内だけでなく海外への航路があり、活気のある世界に開かれた都市でした。清張はこの関門の空気に触れながら育ち、広い視野を育んだともいえるでしょう。



### 田中絹代ぶんか館

所在地／下関市田中町5番7号 Tel:083-250-7666  
開館時間／午前9時30分から午後5時00分まで  
(入館は午後4時30分まで)  
休館日／毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)

連携開催中 10/23(土)～12/5(日)

### 映画女優 田中絹代

～海峡が生んだ日本映画史の華～  
北九州市立門司市民会館松永文庫2階多目的ホール

## 展示品紹介

# 麒麟の香炉



松本清張記念館に再現された応接室は、清張の趣味が感じられる面白い空間だ。調度品や内装は、松本邸から現物がそのまま移され、展示されている。

玄関側の壁にガラスケースが置かれ、中には人形などが飾られている。その上には菊池寛賞正賞の置き時計と、陶器でできた麒麟が並んでいる。目に付く場所に飾っているのは、お気に入りの逸品だったからかもしれない。制作は、有田焼の名匠・今泉今右衛門によるもの。清張と親交があった、十三代の「色絵麒麟香炉」である。

香炉として作られている。一般的に香炉は円や四角をかたどったものが多いが、蓋に生物などの飾りが付いている場合もある。しかしこれは、そのような香炉のイメージからは意表をうけている。清張所蔵の麒麟の香炉は、赤茶色に覆われた胴や脚全体に、色彩豊かに模様を描かれ、迫力のある表情で天に向かって口を開けている。

この十三代の作品を踏襲して「色絵墨はじき環洛路文麒麟香炉」を制作した十四代によると、「有田の土には粘り気がなく、轆轤うろこには適するのですが、動物のようなものは作

高さ十二センチの麒麟は、首の付け根で胴体と分かれています。

りにくい。この麒麟も、形を使っているが、髭などの細かい細工は手作業です。」という。

今右衛門古陶磁美術館で開催されていた「十一代今右衛門展」を拝観した<sup>※1</sup>。昭和初期に創られた十一代の作品のなかにも、動物をかたどった「色絵環洛路文象置物」や「白磁牛香炉」「白磁馬置物」「白磁猪置物」「染付鷹置物」「染付翡翠香炉」があり眼を引いた。伝統の中に革新を重んじてきた各代の陶工たちに、それぞれの意匠と情熱が感じられる。

既に亡き先代に代わって「清張さんは私たちの手仕事による芸術に、共感していたのではないか(先代奥様の回想)ということです」と、十四代は語ってくださった。清張が画工時代に手仕事で身に付けた粘り強く取り組む姿勢は、後に作家として質量ともに超人的な仕事をこなした姿と重なる。昭和五十三年に有田に遊んだ折、十三代と食事をした席で描いた達磨の画が、今も二人の匠の共鳴を物語るようだ<sup>※2</sup>。



十四代今泉今右衛門。自作の麒麟香炉を抱いて。

※1 平成22年10月7日〜12月19日開催  
※2 十四代とは学生時代からの友人という作家・京極夏彦氏が清張生誕100年記念のトークショー(「龍報」32号掲載)でも紹介した。今泉家所蔵。

(専門学芸員 柳原暁子)

## きよしとハルコの探検! 清張記念館

### B1F 休憩コーナー “コーヒー自動販売機” の巻



コールドコーヒーもホットと同じ豆から淹れるので苦くない!

**きよし** コーヒーのいい匂い、何だろう「業界初」? 普通の紙コップの自動販売機じゃないの?

**ハルコ** お金を入れて、好みのコーヒー豆を選ぶのね。隣の機械で豆を挽いて、と。ああ、いい香り!

**きよし** それをさらに隣の機械に入れて、紙コップを置いて、スイッチオン。出てきた出てきた。

**ハルコ** ちょっと手間がかかるけど、この過程も味のうち。途中の香りだって、普通の自販機だと味わえないものね。

**きよし** 清張もコーヒーが好きだったって聞かよ。執筆の合間に、苦ーいのをしめかめっ面ですすってそう!



**ハルコ** と思いきや、砂糖を多めに入れるのが清張流。打ち合わせに来た編集者のカップにも「こうして飲むと美味しいよ」と半ば一方的に——(実話)。

**きよし** 「先生〜、私はそのままのほう…、いや、美味しいです」「うんうん、そうだろう」という編集者の苦い、いや甘い思い出。

**ハルコ** ブラックですこと。

企画展示室横の、喫茶室がリニューアルされました。自販なのに、正真正銘の挽きたてが味わえる、業界初のセルフカフェシステム。豆の種類も5種類と、本格的です。今までどおり、清張全集も置いています。コーヒーの香りに包まれた幸せなひとときをどうぞ。

## ■ イベント「ブックカバーをつくろう」

■ 8月28日(土)・29日(日)  
■ 記念館会議室

「小中学生に〈読む〉以外の手法で清張さんに親しみを持ってもらいたい」と博物館実習中の学芸員の卵である大学生が企画・立案、どうすれば楽しんでもらえるかと当日まで考え抜き準備しました。

両日合わせて12名の参加者に加え、保護者や弟妹の飛び入りもありにぎやかなイベントになりました。清張さんと「球形の荒野」をテーマに、自由に切ったり貼ったり描いたりして制作、それぞれ個性のあるブックカバーが完成しました。



## ■ 黒田征太郎作品展

■ 9月17日(金)～11月15日(月)  
■ 企画展示室

黒田征太郎さんが7月3日(土)、北九州市で行ったランペッター近藤等則さん、チャンゴのキムドクスさんとのライブで制作し、その後加筆した作品15点に、清張の「火の路(原題:火の回路)」よりイメージし新たに制作した作品を加え展示しました。また、会場ではライブの様相を記録した映像も上映しました。



## ■ 北九州ユネスコ文化講演会

■ 10月8日(金) ■ 企画展示室  
■ 講師 高島忠平(佐賀女子短期大学前学長)  
「松本清張と邪馬台国—古代の九州、そして北九州—」  
■ 主催 北九州市・福岡ユネスコ協会

高島忠平さんは、吉野ヶ里遺跡を発掘した考古学者です。平成元年、清張とともに発掘現場を歩きました。

高島さんは、清張を古代史学者として認めていました。清張が論じた「邪馬台国」を振り返りながら、高島氏が研究してこられた「邪馬台国九州説」について講演されました。



## ■ 黒田征太郎「絵話教室」

■ 10月30日(土)  
■ 企画展示室

絵話教室とは、黒田さんが「絵や音楽があるから、人は言葉が通じなくても語り合える、伝え合うことができる」との想いで国内外で展開されている絵画ワークショップです。清張作品に多く登場する〈汽車〉をモチーフに、火と水の力と文明について考えて欲しいと話される黒田さん。3歳から80代まで幅広い年齢の参加者が自由に絵を楽しみました。



## 友の会 活動報告

### ● 平成22年度年次総会

8月4日(水) 参加者 50名  
男女共同参画センター・ムーブ5階大セミナールーム

佐野眞一さんによる記念講演を堪能した後、平成22年度年次総会が開催されました。前年度事業報告・決算、役員改選、今年度事業計画・予算についての審議が行われ、拍手をもって承認されました。

総会終了後の懇親会では、新会長、館長の挨拶や、遠方からの参加者のスピーチ、会員相互の意見交換などが行われ、和やかな雰囲気になっていました。

また、9月には平成22年度第一回の友の会役員会及び幹



事が開催されました。新役員の顔合わせを行った後、今後の友の会の運営や、事業計画などについての話し合いが行われました。多くの意見が飛び出し、意義のある会議となりました。よい友の会事業を展開してまいりますので今後ともよろしくお願いいたします。

### ● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日から翌年7月31日までを一年度として取り扱っています。

今年度も引き続き更新いただきますようお願いします。

また、新規会員も募集中です！友の会では清張ゆかりの地の見学、読書会・講演会の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。会費は1年間で3,000円です。

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

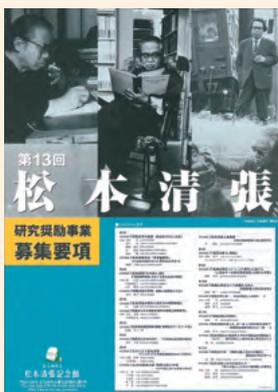
## 第13回

## 松本清張研究奨励事業募集

## 募集要項

- 対象** ①松本清張の作品や人物を研究する活動  
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）  
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限りません。個人または団体も可。
- 内容** 入選者（団体）に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法** 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料（様式は自由、ただし日本語）を、平成23年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。



## 第12回

松本清張研究奨励事業  
奨励金贈呈式

平成22年8月4日、第12回松本清張研究奨励事業奨励金の贈呈式が行われました。入選者は次のとおりです。

## 研究奨励事業入選者

- 企画名** 『清張古代学——『魏志』倭人伝から『魏志』東夷伝の考古学へ』  
**入選者** 東 潮（徳島大学大学院教授）
- 企画名** 『松本清張と近代の巫女たち——『神々の乱心』にみる「御神鏡」の研究』  
**入選者** 共同研究・代表 美馬 弘（多摩美術大学特別研究員）

## 松本清張展(広島)関連講演会

- 6月12日(土)
- 広島市映像文化ライブラリー
- 講師 中川里志（記念館学芸担当）

広島市郷土資料館で開催された松本清張展（4月22日（木）～7月11日（日））の関連講演会で当館の中川主任が、『「点と線」誕生』というテーマで講演を行いました。



展示の様子▶

## ●編集後記●

今年の夏は記録的な猛暑で、この暑さは10月半ばまで続きました。秋らしい秋が訪れる間もなく、10月下旬になると、肌寒さを感じるようになりました。

毎年、年明けにスタートしていた特別企画展ですが、今年の『松本清張と東アジア』は、『日中韓東アジア文学フォーラム2010in北九州』の開催に合わせ、12月1日からの開催となります。企画展を紹介する館報は12月に発行していましたが、今号が11月の発行となったのは、このためです。

また、12月26日まで下関の田中絹代ぶんか館で「清張の原風景」を開催しております。12月に関門にお見えになると2つの清張展を見ることができます。今年の冬は寒くなりそうです。屋内で過ごすことが多くなると思いますが、ぜひ記念館にお越しください。（西本 衛）



イラスト：山藤 章二

編集・発行  
松本清張記念館

〒803-0813  
北九州市小倉北区城内2番3号  
TEL 093 (582) 2761  
FAX 093 (562) 2303  
http://www.kid.ne.jp/seicho  
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00（入館は午後5:30まで）
- 休館日 年末（12月29日～12月31日）
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)  
小学生/200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
小倉駅からは100円バスをご利用いただくのが便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)  
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

